

# 諺及び慣用句の成立と派生

—日韓の事例を中心に—

金 泰虎

キーワード：諺、慣用句、故事成語、隠喩、歴史性、普遍化

## [目次]

はじめに

1. 諺と慣用句の成立と変容
2. 諺と慣用句の成立契機
3. 諺と慣用句の普遍性

おわりに

## はじめに

本稿では、日韓社会で使われている諺や慣用句の中で発生と派生の時期を特定することができるものを中心に、その成立過程について考察することを目的とする。その中で諺や慣用句は、いかに社会に提示（発生）され、普遍化して定着するのか、とりわけ全国にわたって普遍化せず、一定の地域だけに限定して通用される具体的な事例も取り上げ、諺や慣用句の発生・拡散・普遍化・成立・定着という一連の過程を追究する。

諺や慣用句は社会に定着した後、化石のように存在する不易性のものではなく、時代の変遷に応じて言語が変貌を成し遂げると同様、同じ意味の新たなものが派生する「歴史性」をもつ。ここでの歴史性とは、従来の諺や慣用句に代わり得る同じ意味の新たなものが派生して成立するという意味である。

従来、日韓社会の諺や慣用句をめぐる発生や歴史性という観点に基づいての分析はほとんど行われていない。その理由は発生及び派生、そして成立の時期

が特定できる諺や慣用句が多くないからである。諺や慣用句の発生及び歴史性による派生を考察するためには、時期を特定することは欠かせないのである。その時期の特定には、諺や慣用句に用いられる素材や記録、そして出来事の経緯に関わることを手掛かりにして分析を行う。

本稿では、日韓社会における諺や慣用句の発生と歴史性による派生という観点に基づき、諺や慣用句に取り入れている素材、それと関連する歴史や出来事の時期を推測することができるものを中心にして分析を行う。そこで、諺や慣用句の発生と派生から定着までの一連の過程を明確にする。その中で社会に提示された諺や慣用句に繋がるものが拡散し普遍化するという過程において広範囲の社会には普遍化に至らず、一定の地域だけに通用される諺や慣用句も踏まえて追究を行う。

## 1. 諺と慣用句の成立と変容

### 1-1. 日韓の諺と社会

日本の『古事記』と『日本書紀』には「雉の頓使い（きぎしのひたづかい）」、すなわち「使いに行行って帰ってこない雉」という内容が記載されている<sup>1)</sup>。前者の『古事記』は、和銅5（712）年に太安万侶（?～723）が編纂した日本最古の歴史書である。そして、後者の『日本書紀』は『古事記』を編纂した8年後の養老4（720）年に舎人親王（676～735）などが編纂した歴史書である。

この『古事記』と『日本書紀』に収録されている「雉の頓使い」の背景には、日本の天孫降臨という神話に関わっている。天孫が降臨をする前、天から地上を偵察させるため「天若日子（あめわかひこ）」を「葦原中国（あしはらのなかつくに）」に派遣したが、天若日子は葦原中国の主人である「大国主命（おおくにぬしのみこと）」の娘である「下照姫（したてるひめ）」と結婚し帰ってこなかった。そこで、天から再び使者の「雉の天の鳴女（きぎしのおまのなきめ）」を地上に遣わした。天若日子が矢で雉を射たところ、矢が雉を貫通して天にまで達した。天からその矢を地上に投げ返したら矢が天若日子の胸に当たり、彼が死んだという内容である<sup>2)</sup>。そこから日本では「雉の頓使い」というのは、「使いに行行って帰ってこない」という意味の諺として成立したのである。

要するに、「雉の頓使い」は天孫降臨という内容をもって権力者を神格化する過程で発生したと言えよう。この内容は『古事記』を編纂する以前、つまり712年の当時の人々に広く知られていたことを収録したのか、それとも編纂の過程で作られた記録なのか、定かではない。

一方、韓国社会では「使いに行つて帰つてこない」の意味として「咸興差使」という諺を用いる<sup>3)</sup>。この諺の起源は朝鮮王朝を開創した太祖の李成桂(1335~1408)が末子の芳碩(?~1398)を王位の継承者として太子に据えた。それに不満を抱いた5男の李芳遠(1367~1422)は、1398年に王子の乱を起こし、芳碩と朝鮮王朝の開国に尽力した功臣たちを殺した<sup>4)</sup>。そこで、心を痛めた李成桂は1398年に次男である定宗の李芳果(1357~1419)に王位を譲り、故郷の咸興(現在の朝鮮民主主義人民共和国の咸鏡南道)に戻つたということから始まる。

その2年後の1400年には、さらに定宗が弟である太宗の李芳遠に譲位をした。即位した太宗は父の李成桂を漢陽(今のソウル)に還宮させるため、数回に亘つて使いの「差使」を咸興に送つた。しかし、李成桂はすべての差使を帰らせなかつたということから「咸興差使」の諺が発生した。つまり、諺の発生に関わる経緯が明確であれば、その時期を推測することができる。

このように、日韓社会における諺の中では発生及び歴史性による派生の時期を推測することができるものがある。その推測ができる諺や慣用句は記録や背景の経緯、そして出来事と深い関わりをもっているため、諺や慣用句の発生及び歴史性による派生、また成立過程を追究する上で重要な手掛かりになる。

## 1-2. 日韓社会における諺の歴史性

日韓社会の諺と慣用句は化石のように、成立したものだけが固定化されて通用するのではなく、同じ意味の新たな諺や慣用句の歴史性による派生が起きる。この派生する新たな諺や慣用句を分析するため、その素材や背景の経緯に関連する時期を推測することができるものを中心に考察を行う。

日本社会では、既に言及してきた「使いに行つて帰つてこない」という「雉の頓使い」だけでなく、これと同じ意味として(表1)の□「鉄砲玉の使い」

という諺も用いる。『鉄砲記』によれば、鉄砲は天文 12 (1543) 年、種子島に漂着したポルトガル (Portugal) 人が伝来したと記されている<sup>5)</sup>。この『鉄砲記』は慶長 11 (1606) 年、種子島の 16 代島主である種子島久時 (1568~1612) が薩摩国の大龍寺の禅僧である南浦文之 (玄昌) (1555~1620) に編纂させた鉄砲伝来の歴史書である。

そこで、鉄砲という素材を用いる諺や慣用句の背景を把握するため、以下の (表 1) では、鉄砲を素材に取り入れている諺や慣用句を網羅する。

(表 1) 日本の鉄砲に関わる諺及び慣用句

番号	鉄砲の諺	意味合い	備考
一	入鉄砲に出女	鉄砲の所持を厳しく取り締まる	216
二	鉄砲玉の使い	行ったきり帰ってこない	483
三	鳩が豆鉄砲を食ったよう	突然の事にびっくりしきよんとする	三四七
四	肘鉄砲を食わせる	誘いや申し出を断る	デジ
五	下手な鉄砲も数撃てば当たる	たくさんやってみれば中にはまぐれで当たる	538
六	矢でも鉄砲でも飛んでこい	矢でも鉄砲でも持ってこい	五一〇
七	矢でも鉄砲でも持ってこい	どんな手段でもかかってこい	五一〇
八	闇夜の鉄砲	当たるかどうか心もとなないこと	612

\*備考の数字は『岩波ことわざ辞典』(岩波書店、2002年)の頁

\*備考の漢数字は『日本語慣用句辞典』(東京堂出版、2005年)の頁

\*参考のデジは「デジタル大辞泉 (小学館)」(『電子辞書』CASIO、2013年)

(表 1) のように、日本社会では鉄砲を素材にする諺や慣用句が多いが、このほかに語彙も多い。例えば、無鉄砲 (善悪と結果を考えずに行動すること)、鉄砲水 (突然、水が急激に流れてくること) などを挙げることができる。この諺や慣用句、ひいては語彙に鉄砲が散見されるのは、鉄砲伝来以降も日本では武家が支配をする社会であったことと深い関係があるからであろう。

これらの鉄砲を素材にした諺と慣用句、そして語彙は鉄砲の伝来以降、つまり鉄砲の伝来が契機となり発生したことに間違いはない。しかし、鉄砲の伝来後、いつ成立されたのか、その正確な時期までは明確にできない。便宜上、鉄砲の伝来をもって諺や慣用句に繋がるものが社会に提示 (発生) されたことと見なすことにする。但し、 は江戸幕府が諸街道に設けた関所で江戸への鉄砲の持ち込

み、また江戸に住まわせた諸大名の妻女が関外に出るのを厳しく取り締まったことから由来する。その取り締まりの理由は、諸大名の謀反を警戒したためである。このことを鑑みると、ミイラの成立は鉄砲の伝来から大凡1世紀後であると推測される。

次に、日本社会では「雉の頓使」に代わる「鉄砲玉の使い」のほかにも「ミイラとりがミイラになる」という諺がある。「ミイラ」は、ポルトガル語である「mirra」で鉄砲伝来以降16～17世紀の南蛮貿易を通じてポルトガル人から日本に伝来した語彙と考えられる<sup>6)</sup>。

ところで、南蛮貿易とは文字通り、南にいる蛮との交易を意味する。伝統的な中華思想は中国を取り巻く四方の諸民族を野蛮人と規定し、南の野蛮人を南蛮と見なす。日本では16世紀以降の大航海時代に入ってポルトガル人とスペイン (Spain) 人を南蛮と呼び、これらとの交易を南蛮貿易と称した。

この「鉄砲玉の使い」と「ミイラとりがミイラになる」は「雉の頓使」より、その成立の時期が遅いのは明らかである。両者は鉄砲の伝来、そして南蛮貿易によってもたらされた文化、あるいは世紀の発掘のいずれかによって派生した諺なのである。言い換えれば、「使いに行つて帰つてこない」という意味の諺は、古代日本の「雉の頓使」、16世紀以降の「鉄砲玉の使い」、さらに「ミイラとりがミイラになる」に派生してくる時系列的歴史性を持っている。要するに、「雉の頓使」に代わる新たな諺である「鉄砲玉の使い」や「ミイラとりがミイラになる」は、その発生時期が推測できるため歴史性による派生の分析に適している。

一方、韓国社会でも「使いに行つて帰つてこない」という意味の「咸興差使」のほかに、同じ意味合いの「江原道砲手」(直訳: 江原道の狩人)、「뽕 구워 먹은 소식」(直訳: 雉を焼いて食べた消息)、「終無消息」という諺がある。しかし、「뽕 구워 먹은 소식」や「終無消息」は発生と成立に繋がる手がかりとなる素材や背景に関わる経緯の時期を特定するのが難しい。

「江原道砲手」は派生の時期を推測することができるが、江原道と砲手が結合している諺である。江原道は、朝鮮時代の太宗13(1413)年に8道制を実施した後から生まれた地名である。そして、前近代の韓国社会に鉄砲が伝来され

たのは、文禄の役（1592）がきっかけである。文禄の役の際、豊臣秀吉軍の一人として朝鮮侵略に参戦した沙也可（1571～1641）が朝鮮側に投降し、鉄砲を製造する技術を伝えたとされる。その後、宣祖 27（1594）年より朝鮮は独自に鉄砲を製作した<sup>7)</sup>。ここでの砲手は、大砲を撃つ人ではなく狩りをする人であり、その意味で火縄銃（鉄砲）が伝来された後、江原道と結合して発生し成立された諺なのである。

要するに、「江原道砲手」は朝鮮時代における 8 道制の実施、そして鉄砲の伝来という 2 つの出来事が融合して派生した歴史性をもつ諺である。「江原道砲手」の背景の経緯に関する理解を助けるため、韓国の地理に関して触れる。江原道は、地形的に山が深い地域なので必然的に動物もたくさん生息しており、狩りに適している。そこで、深い山に狩りに出かけた狩人が道に迷ったりすることが多く、なかなか帰ってこないことから由来している諺である。つまり、「江原道砲手」は韓国の地理的特徴に鉄砲という出来事が加わっているが、「咸興差使」より後の時期に派生して成立した。

## 2. 諺と慣用句の成立契機

日韓社会の諺や慣用句は、何らかの契機さえあれば、すぐ発生したり派生したりして諺や慣用句として成立に繋がるのであろうか。

一般的に諺や慣用句として成立するためには、まず次の 3 つの契機によって社会に提示される過程が必要である。以下では、諺や慣用句に繋がるものが「社会に提示」されるということは、諺や慣用句の「発生」である。諺と慣用句に繋がるものが社会に提示され、成立に至るが、ここでも素材や背景の経緯から時期が推測できるものを中心に考察を行う。

一つ目は、社会の出来事を目撃したり、または体験したりすることの契機を通して社会に提示される。その事例として、日本では「赤信号皆で渡れば怖くない」という諺が取り上げられる<sup>8)</sup>。日本社会における交通信号は、1919 年、最初に東京上野広小路の交差点に手動式信号機が設置された<sup>9)</sup>。当時、信号機は新しく登場した文明で人々に興味を引く素材であったため諺や慣用句に繋がる素材となり、社会に提示される契機になったと言える。

一方、韓国では「비행기 태운다」(直訳：飛行機に乗せる、意識：誉めすぎる)という諺がある。元来、飛行機は1903年に米国出身のライト兄弟(Wright Brothers)、すなわち兄のウィルブル・ライト(Wilbur Wright)(1867~1912)と弟のオルビレ・ライト(Orville Wright)(1871~1948)が、世界で最初に有人飛行に成功した。この飛行機が韓国社会と韓国人に初めて姿を見せたのは、1920年にイタリア(Italy)人のアルトゥーロ・フェラリン(Arturo Ferrarin)(1895~1941)であった。彼は1920年2月14日にローマ(Roma)を出発し、コリア(Korea)半島を經由する飛行をして、同年3月31日に東京に到着した<sup>10)</sup>。すなわち、韓国人にとって飛行機という素材が慣用語の発生に繋がるきっかけになった。

この日韓社会の信号機や飛行機について目撃したり、体験したりすることで諺と慣用語に繋がるものが社会に提示されたのである。

二つ目は、日常生活の中で観察したり、自覚したりすることをきっかけにして社会に提示される。日本の「泣く子と地頭には勝たれぬ」という諺が事例と言えるが、泣く子と地頭の素材が結合している。日常生活の中で泣いている子供を頻繁に見ることができるが、中では親が子供を泣き止ませることができず、困ってしまう場合がある。つまり、泣く子を泣き止ませるのは容易ではないことを観察したり、自覚したりしたのである。

そして、平安時代(794~1192)中期から地頭は存在したが、武士が政権を握る鎌倉時代(1192~1333)には、本格的に在地に地頭職を任命した<sup>11)</sup>。地頭には在地の荘園と国衙領における治安維持を担ったが、次第に在地で権力を振るう地頭が多くなった。地頭が荘園を侵略したり、勝手に年貢を取り立てたりすることが多発し、地頭が引き起こした弊害を止めることが難しいことを人々が自覚したと考える。

一方、韓国では(表2)の⑧で示しているように、「양반 도둑이 호랑이보다 무섭다」(直訳：両班泥棒が虎より怖い、意識：両班による弊害が虎より残酷で怖い)という諺が取り上げられるが、両班と虎の素材が結合している。

前近代の韓国における官僚制のもとでの両班は、官僚の文班と武班を合わせた意味である。この両班は科举制度と密接な関係がある。後周から高麗に帰化

した雙冀（?～?）の建議によって高麗の光宗9（956）年、科挙制度を導入して以来、両班という言葉が生まれた。両班が社会の特権階級に成長し、一般民衆に弊害を及ぼしたり、反感を買ったりすることが多発するのは、朝鮮時代（1392～1895）の中期以降のことである。

また、前近代の韓国社会において虎の被害、つまり「虎患」が多かったことはよく知られている。虎は童話の素材にもなり、「호랑이보다 무서운 꽃감」（直訳：虎よりも怖い干し柿）という話が登場するほどである<sup>12)</sup>。

この日韓社会における泣く子や地頭、そして両班と虎のことは、当時の人々が観察したり、自覚したりしたことを通して社会に提示されるようになったのであろう。

ところで、(表1)で言及してきたように、日本は武家社会の影響で鉄砲を素材にした諺や慣用語、そして語彙が多い。一方、前近代の韓国社会、とりわけ朝鮮は両班が支配する社会だったため両班を素材にした諺や慣用語が多く成立したと考える。

以下の(表2)では、両班を素材にした諺と慣用語の一覧を示し、民衆に被害を与える存在だけではない側面も提示を行うことにする。

(表2)に基づいてみると、民衆に被害を与える悪い両班のイメージ(Image)に関わる諺や慣用語は⑦⑧⑩⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳である。しかし、両班が悪質で恐ろしい存在ではなく、むしろ自尊心があり、知識人であり、威厳を持っているという側面の諺や慣用語が多い。それは朝鮮時代の支配層で社会の中樞をなす身分であったためであると考えられる。例えば、②④⑤⑥⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳は両班の地位と関わる面子の大事さを示している。つまり、朝鮮時代における両班の姿が民衆には、面子を重視しつつ、威厳を表すものである。とりわけ、⑭「양반은 죽어도 문자 쓴다」における「文字」とは、日常生活において「書く字」（直訳）の意味ではなく「難しい文言」（意訳）の意味である。この⑭の両班は、知識を身につけている知識人であることを威張ろうとした存在だという民衆の批判である。この裏を返せば、両班は民衆に知識人として認識されたという証でもあると言えよう。



(表2) 韓国の両班(양반)に關する諺及び慣用句

番号	兩班の諺	直訳	意味合い	備考
①	가난한 양반 씨나랏 주무르듯 한다	貧しい兩班が稲種をむむようにする	丁弊にもむこと	七一
②	나웃이 석차라도 먹어야 양반	肥が三尺でも食べてこそ兩班	風貌が良くても食べなければならぬ	六一
③	물세 양반	成り金の兩班	金さあれば兩班	一〇九
④	머리 큰 양반 발 큰 도둑놈	頭が大きい兩班 足が大きい泥棒	頭が大きいと兩班で足が大きいければ泥棒	二〇六
⑤	수염이 대차라도 먹어야 양반이다	髭が立派であつても食べてこそ兩班	威儀があつても食べなくてはならない	二〇五
⑥	양반 김칫국 떠먹듯	兩班がキムチ汁を飲むように	上品な態度の人	四一七
⑦	양반 배리고 받기 맞는다	兩班を泥棒が泥より飾り	權力者に挑んで構する	四一七
⑧	양반 도둑이 호랑이보다 무섭다	兩班は虎よりも怖い	兩班の殘虐性	二二六
⑨	양반 도새 끼를 훔으면 원장 맛보란다	兩班も三食を食べなければ味づける	飢えたと雖でも兩班は考えず食べ物を探す	二二六
⑩	양반 못된 것이 장에 가 호령한다	出來の悪い兩班が市場に行つて命令する	相応しくない場所に行き偉そうに振舞う	四一七
⑪	양반은 안 먹어도 긴 트렁	兩班は食べなくても長いつらぶ	面目を重削する	四一七
⑫	양반은 죽어도 쇠붙은 안 썩인다	兩班は腐つても死んでも鐵の火には当てない	面目を重削する	二二六
⑬	양반은 죽어도 개해업은 안 한다	兩班は溺れても犬のように泳がない	大変なことがあつても面子を保つ	四一七
⑭	양반은 죽어도 묻지 안다	兩班は死んでも文字を使ふ	知識人の振る舞い	四一七
⑮	양반은 죽을 먹어도 이를 후신다	兩班は粥を食べても爪楊枝をする	面目を重削する	四一七
⑯	양반은 하인이 양반시킨다	兩班は僕が兩班をつくる	下のを大事にする	四一七
⑰	양반의 새끼는 고양이 새끼요 상놈의 새끼는 돼지 새끼라	兩班の子供は豚、下人の子供は豚の子だ	兩班の子女をほめること	四一七
⑱	양반의 재석이 열들이면 호새를 친다	兩班の子供の12人が号牌をつける	裕福な家の子供は出世する	四一七
⑲	양반의 집 못 되려던 초라니 새끼 난다	兩班の家が潰れる場合は愛な女の子の形が生まれる	家系が傾いたら愛なことが起さる	四一七
⑳	양반이 많을 한 개가 왜장구이라고	兩班は數1個が解解汁だという	少し食べても豊かなことの意味合い	四一七
㉑	양반 지게 진 것 같다	兩班が背負子を負っているよう	下手な行動	四一七
㉒	양반 과일 쓰고 한 번 대면보인 예사	兩班が被笠(赤口帽子)をかぶつて一度大便するのは普通	人が恥知らずがのこをするのは茶飯事	四一七
㉓	양반인가 두 날 반인가	兩班なのか二両半なのか	兩班をからかうこと	四一七
㉔	부름 양반	貴い兩班	權力のある兩班	三一一

\*備考の漢数字は『속담사전(ことわざ辞典)』(民俗院, 2002年・韓国)の頁  
 \*備考の数字は 国立国語研究院『標準國語大辭典』(斗山東社, 1999年・韓国)の頁

三つ目は見聞を通じたり、または学習をしたりすることで社会に提示をする。日韓社会では、中国を題材にした共通の諺や慣用語を多く用いている。例えば、日本では「孟母三遷の教え」、同じ意味として韓国では「孟母三遷之教」が取り上げられる。

孟子 (BC372~BC289) は、鄒と呼ばれる地方の人で母親が孟子を育てる時、最初は葬儀をするところの近くに住んでいた。ところが、母親は孟子が葬儀遊びをするのを見て市場付近に引っ越しをした。ここでは孟子が店屋ごっこ遊びをするのを見た母親が再び「書堂」近くに移り住んだところ、孟子は学問に志したということが背景にある諺である。

日韓社会では、他にも中国由来の2字、または4字の故事成語も多く使っている。その2つずつの事例を取り上げることにする。2字の故事成語としては「杞憂」がある。杞は周代 (BC1046~BC256) の国名、憂は「心配をする」という意味である。つまり、杞の国の人が「天が崩れ地面が陥没するのではと心配をして、夜に眠れず、食事もできなかった」という『列子 (天瑞)』の古事に由来するもので無駄な心配をするという意味合いである。

そして、「推敲」という語彙も中国から伝わっている。その意味は、詩文の字句を複数回にわたって添削したりすることである。この故事は唐の詩人である賈島 (779~843) から由来する。賈島の「題李款幽居」という詩の中で「僧敲月下門」、すなわち僧が月の下の扉を「推す」とするか、それとも「敲く」とするか迷ったということから始まった<sup>13)</sup>。

そして、4字の故事成語としての「四面楚歌」は、四方から楚の歌が聞こえるということである。つまり、敵に囲まれ誰の助けも受けることができない孤立した状態を意味する。楚 (BC?~BC223) の項羽 (BC232~BC202) と漢 (BC206~220) の劉邦 (BC256~BC195) が天下の覇権をかけて争う時、項羽は漢の名将である韓信 (BC?~BC196) に包囲された。項羽は残った兵士を率いて烏江まで逃げたが、渡ることができず、結局は自決をしたという背景のストーリー (Story) がある故事成語である。

また「呉越同舟」は『孫子』の「九地篇」に登場する呉 (BC?~BC473) と越 (BC600?~BC306) の人が同じ船に乗ったという故事成語である。つまり、

敵対関係にある者同士が利害関係のために結束をするということの隠喩である。

これらの中国の事柄が素材になっている諺と慣用句、そして2字及び4字の故事成語が日韓社会に伝わり、それを見聞したり、あるいは学習をしたりすることを通して社会に提示されたと考える。

以上の3つの契機を通して諺と慣用句に繋がるものが社会に提示（発生）されるが、すぐ諺や慣用句として成立するわけではない。要するに、社会に提示された上、拡散され、また人々に共感されて普遍化する過程を経て成立し定着する。なお、歴史性によって新たな諺と慣用句として派生する場合も同じ過程を辿る。

### 3. 諺と慣用句の普遍性

#### 3-1. 拡散と定着

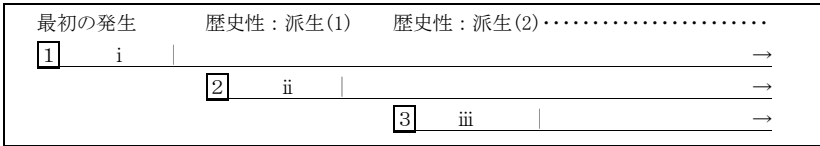
諺や慣用句の発生は、言及した3つの契機という前提が必要である。その契機を通して社会に提示（発生）されるが、それが直ちに諺や慣用句の成立に繋がるのであろうか。社会に提示された諺や慣用句に繋がるものが諺や慣用句として成立する過程について考察を行う。

諺や慣用句に繋がるものが社会に提示されたり、あるいは新たに同じ意味の諺や慣用句が派生したりするが、そのそれぞれは成立するまで同じ過程を辿る。ところで、諺と慣用句の発生や派生、拡散、普遍化、成立、定着という過程を明確にするには困難が伴う。なぜなら、ほとんどの諺や慣用句は、いつ社会に提示されたのか、また素材や背景の経緯から時期の推測をすることが難しいためである。

次の（表3）は、諺と慣用句の発生から定着に至るまでのメカニズム（Mechanism）を図式化したものである。

諺と慣用句に繋がるものが社会に提示されてもすぐ諺や慣用句として成立して定着するわけではない。（表3）でみるように、社会に提示されたものが成立するためには、まず拡散され普遍化する過程が必要である。すなわち、社会に提示されたものに対し人々が納得して拡散させ、よく使うようになる普遍化という過程を経て成立し、はじめて定着する。

(表3) 諺及び慣用句の発生・拡散・成立・定着のメカニズム



- \* **1**、**2**、**3**は、諺と慣用句に繋がる事柄の社会への提示（発生）
- \* i・ii・iiiは、諺と慣用句が社会に拡散・普遍化する期間
- \* | は、諺と慣用句として社会に成立
- \* → は、成立した諺と慣用句が社会に定着して用いられている状態

諺と慣用句の成立は、最初は(表3) **1**のように、社会に提示されること（発生）から始まる。一方、同じ意味の諺や慣用句が歴史性によって派生されるのも、**2**と**3**のように新たに社会に提示される。つまり、最初の社会への提示か、あるいは歴史性の派生による新たな社会への提示かという差はあるが、社会に提示されたもののいずれも諺や慣用句として成立して定着する過程は同じである。

最初の提示である**1**における i、そして派生による新たな提示の**2**と**3**における ii・iiiは社会に拡散し、普遍化して成立する期間ないし時間である。付言すると、**1**、**2**、**3**のような社会への提示という発生、そして i・ii・iii という期間における拡散、普遍化の過程を経て成立し定着するのである。

### 3-2. 社会への伝達手段

社会に提示されたものが社会に拡散するためには伝達の役割が極めて重要である。そこで、社会に拡散する伝達のメッセンジャー (Messenger) として重要な役割は、人はもとよりその人の移動を支える交通手段、マスコミ (Mass Communication)、出版が果たしていると言える。

すでに言及してきた日韓社会の「使いに行き帰ってこない」という意味の諺が発生し、さらに歴史性をもつ新たな諺と慣用句として派生して、加わっていくことについて時系列に図式化したのが、以下の(表4)である。

(表4) 日韓の「使いに行行って帰ってこない」という意味の諺の発生と歴史性(派生)

時期		712年	1400年	1543年	1549年	1594年	1603年	現在
成立過程	日本	⊖	_____	⊖	_____	⊖	_____	
	韓国		①	_____		②	_____	
				*?.....*?.....*?.....				

- ・日本：⊖「雉の頓使」、⊖「鐵砲玉の使い」、⊖「ミイラとりがミイラになる」
- ・韓国：①「威興差使」、②「江原道砲手」、\*「평 구워 먹은 소식」、\*「終無消息」

(表4) ⊖は、『古事記』の編纂時には、すでに社会に定着していたものを収録したのか、それとも編纂者が作った話を記録したのか、断定はできない。しかし、本稿では便宜上、歴史書の編纂時点をもって諺の社会への提示(発生)の時期と見なすことにする。

次の⊖は、鉄砲が伝来されたからと言って直ちに諺や慣用語の成立に繋がったとは言えない。例えば、すでに取り上げてきた(表1)の□は、その成立は鉄砲の伝来時期より下の江戸時代と言われる。しかし、(表1)の□、つまり(表4)の⊖は鉄砲の伝来時点を諺や慣用語の発生時期としたい。

⊖のミイラという語彙は、南蛮貿易に伴うポルトガルの商人の往来によってポルトガルの言葉が日本に伝わったが、諺としては南蛮貿易と同時に成立したとは言えない。すでに言及してきたが、江戸初期にミイラ取りの情景が見られ、江戸中期には諺として成立していると考えられる。しかし、(表4) ⊖は江戸初期に社会への提示が見られるため、徳川家康(1543~1616)が江戸幕府を開府する慶長8(1603)年に成立したと見なすことにする<sup>14)</sup>。

ところで、「鉄砲の伝来」が南蛮貿易の始まりだという見解がある。一方、イエズス会の宣教師であるフランシスコ・デ・ザビエル(Francisco de Xavier)(1506~1556)が鹿児島に上陸した天文18(1549)年をもって南蛮貿易の始まりともされる<sup>15)</sup>。当時の宣教師は移動手段の船を持っておらず、南蛮貿易をする商人の南蛮船に便乗して移動したため、一般的にザビエルの来航は南蛮貿易の始まりという理解がもっとも説得力がある。しかし、ザビエルの来航以前、

薩摩国の鹿児島で殺人の罪を犯したアンジロー（1511?～1550）という人が今のマレーシア（Malaysia）のマラッカ（Melaka）まで逃亡した。その逃亡先でザビエルと出会い日本の案内役として同行し日本に上陸した<sup>16</sup>。この裏を返せば、ザビエルの来日以前、アンジローがマラッカまで逃亡することができたのは日本に南蛮船が寄港していたためである。天文15（1546）年にアンジローは薩摩半島最南部の山川にやって来たポルトガル船に乗り、マラッカまで逃げられた。つまり、鉄砲の伝来とザビエルの上陸の間、すでに南蛮船による南蛮貿易が行われていたのである。

一方、韓国社会における「使いに行つて帰つてこない」という意味の諺、つまり（表4）の①と②は、社会に提示された年代の推測ができる。しかし、同じ意味の「땡 구워 먹은 소식」や「終無消息」の素材からは、いつ社会に提示されたのか、その時期の推測ができない。この2つの成立は①と②の発生以前なのか、あるいはその間なのか、それともそれ以降なのか、時期が定かではない。

そこで、諺や慣用語が社会に提示、成立という過程について注目する。まず結論から言えば、近代国民国家成立以降は交通手段が整備され、マスコミをはじめとする出版物が発達し、諺と慣用語が社会に広がる速度は近代国民国家成立期以前より早くなったということである。

すでに取り上げたように、日本社会には「赤信号皆で渡れば怖くない」という諺がある。諺の素材である交通信号が日本では、1919年に初めて設置された。その後、1960年代の高度経済成長期に入ると、自家用車の所有者が増え自動車の数が急激に増加した。この影響をうけ、高度成長期には道路の拡充とともに信号も多く設けられた。この信号機の導入時期を考えると、社会に提示され定着するまで長い時間はかからなかった<sup>17</sup>。

一方、言及した韓国社会における「비행기 태운다」という表現の素材である飛行機は、1903年にライト兄弟が有人飛行を行った以降のことである。その後、1920年にイタリア人アルトゥーロ・フェラリンが韓国に飛来した。この飛行機という文明を考えると、「비행기 태운다」も社会に提示されて拡散し成立するまで、あまり時間はかからなかった。

ちなみに、韓国社会における隠喩の「뱀주병이다」(直訳: ビール瓶だ、意識: 泳げない)は、日本では金づち(意識: 泳げないという意味)である。このビール(Beer)瓶が韓国に伝わったのは、朝鮮王朝が門戸を開放する時期よりも少し早い段階である。つまり、一貫して鎖国政策を堅持した朝鮮が正式に日本と丙子修好条約(別称は江華島条約という)を結び開港をした高宗13(1876)年よりやや遡る。高宗8(1871)年、アメリカ(America)の軍艦が朝鮮に開港を迫る、いわゆる「辛未洋擾」の過程でビール瓶が伝わった<sup>18)</sup>。この伝来過程を考えると、慣用語として成立するまではあまり時間を要していない。

このように、日韓社会に信号機、飛行機という文明が西洋から伝わり、これらを諺や慣用語の素材に取り入れているため、その発生時期が推測できる。このことを鑑みると、諺や慣用語に繋がるものが社会に提示され、諺や慣用語として成立するまでの期間は短い。すなわち、社会に提示された後、迅速に拡散して普遍化し、成立して定着する理由は、近代国民国家成立以後における交通手段の発達、マスコミをはじめとする出版が深く関わっていると考える。交通の発達による人の移動、そしてマスコミや出版を媒体にして(表3)で見る i・ii・iii の期間は大幅に短縮された。

要するに、一般論として諺や慣用語の素材を手がかりにして発生時期の推測ができて時代によって成立までの速度は異なると考える。近代国民国家の成立期以降は移動(交通)手段をはじめとするマスコミ、すなわち新聞、ラジオ(Radio)、テレビ(TV)、そして出版などが発達するため、諺と慣用語が社会に拡散する速度は速かったと言えよう。

一方、前近代には近代国民国家成立以降より交通手段とマスコミと出版が発達しておらず、主に人を經由して配信され拡散する傾向が強かった。前近代には諺や慣用語に繋がるものを社会に提示した人、あるいは社会に提示されたものに感化された人に会ったり、さらには社会に提示されたことの記録に出会ったりして拡散され成立したという推論ができよう。

### 3-3. 普遍化と地域性

諺と慣用語に繋がるものが社会に提示されると、そのすべてが諺や慣用語と

して成立するのか。その一端がわかる日韓社会の諺や慣用句を取り上げることにする。

グローバル (Global) 化時代に入ってから、諺や慣用句に繋がるものの社会への提示は様々な媒体を通じて急速に、しかもリアルタイム (Real Time) で人々に拡散する。以前の時代と比べて諺や慣用句に繋がるものの拡散の速度は速くなったが、諺や慣用句として成立し定着するまでには至らず流行語で終わってしまう場合が多い。すなわち、社会の人々に拡散はできるが、ほとんどは後世に残るような諺や慣用句として成立せず、一時的な流行に終わり定着しない。

しかし、現代のマスメディアから社会に提示されて流行し、一過性で消えずに成立して定着したケースがある。その代表的な事例としては「赤信号皆で渡れば怖くない」が取り上げられる。言及したように、そもそもは 1979 年に漫才師ツービート (Two Beat) が言い出して流行語となって社会に定着したと見なすことにする。近年は、「～皆で～怖くない」という部分を生かしたもじりも多く作られ、赤信号を省いた形が多くみられる。

ところで、日韓社会では諺や慣用句として成立はしているが、一定の地域だけに留まる場合がある。諺や慣用句として全国的な拡散までは至らず、特定の地域でしか普遍化していないものである。言い換えれば、社会に提示されたものが広範囲には拡散されず普遍化に失敗したケースであると言える。

例えば、日本では東北地方の福島県会津市を中心とする地域に「蒙古がくる」(意識：怖いものがくる) という諺が伝わっている<sup>19)</sup>。この根源を追跡してみると、次の歴史的事実と深く関わっていることがわかる。

13 世紀、蒙古は中国大陸を支配下に入れた後、東は高麗、西は東欧に至るまでの領域を征服する大帝国を建設した。東アジアで蒙古は高麗を先立たせて鎌倉時代の日本まで征服をしようと企てた。そこで蒙古は二度にわたって日本を攻撃しており、これが文永 (1274)・弘安 (1281) の役である<sup>20)</sup>。

蒙古襲来の当時、日本では北条氏が執権政治を行っていた時期である。北条氏は蒙古の侵略に当たり、猛攻を撃退するため、東北地方の武士を九州、つまり今の福岡地域に移動させて防御に備えた。この「蒙古がくる」という諺は、



東北地方の会津地域から九州に防御に赴いた武士が任務を果たした後、会津地方に戻り、その地域社会に提示したものであると言えよう。当時、会津郡辺りに所領をもっていた佐原氏の子孫である三浦頼盛（?～?）が九州のほうに赴いたと推測する<sup>21)</sup>。

しかし、「蒙古がくる」という諺は、全国的に拡散して普遍化し定着するまでには至らず東北地方、すなわち会津という限定された地域だけを中心に今も使われている。つまり、「蒙古がくる」は(図1)の②のように歴史性によって派生したものと考えるが、全国レベル (Level) までの拡散はしていない。

なお、蒙古襲来の後から随分の時間が経過した 19 世紀半ばになると、日本では黒船の来航という出来事が起こる。つまり、幕末の嘉永 6 (1853) 年、米国のペリー (Perry) 提督が率いる艦隊が現在の神奈川県横須賀市東部である浦賀に来航して開港を求め当時の日本国内に大きな衝撃を与えた。この黒船は欧米の日本進出と圧力の象徴として日本社会に一種の恐怖感を与えたのである。

これ以降、黒船は「蒙古がくる」とほぼ同じく外国からの大きな衝撃や恐怖感を与える意味の言葉として使用されるが、主に恐怖感として読み取ることが多い。いわば、「蒙古がくる」が(図1)の②の派生だとすれば、黒船は③の歴史性による派生であると見なすことができる。

ごく最近の黒船の事例としては、「日本の大学にも押し寄せる中国の波 (学生)」による恐怖感を感じる意味で「令和の黒船」という表現を用いている<sup>22)</sup>。そして「電子書籍は出版界の黒船となるか」と言われたりもする<sup>23)</sup>。海外からの新しい計画、政策、新製品などが国内に大きな衝撃をもたらす意味合いである。

日本社会における黒船は「蒙古がくる」とほぼ同じ意味合いとして使われており、歴史性によって派生して成立した慣用句である。要するに、「蒙古がくる」は広範囲の社会に拡散はできておらず、一定の地域に留まっているが、「黒船」は全国的に広まっている。前者の蒙古は弘安の役が終わってからの 13 世紀の後半頃、そして後者の黒船は幕末の嘉永以降、19 世紀の後半頃に社会に提示されたと考える。

韓国では日本と同じ意味の「怖いものが来る」という意味の諺や慣用句は、

「호랑이가 온다」(直訳：虎が来る)や「호랑이보다 무서운 곳감」を取り上げることができる。前近代の韓国社会では虎が生息しており、その虎による被害が多く、そこで虎に関連する諺や慣用句が数多く成立している。

恐怖の虎は、朝鮮時代には都城の漢陽にまで出没したとする。大正期(1912～1926)まで韓国の南部地域である全羅道や慶尚道で虎狩りを行い捕獲している<sup>24)</sup>。

この虎は、恐怖感を与えるものではあるが、薬としても活用されていた。文禄・慶長の役(1592～1598)の際、朝鮮を侵略した日本の武将である島津義弘(1535～1619)は病気にかかっていた豊臣秀吉(1537～1598)のため虎狩りを行い治療薬として献上した<sup>25)</sup>。

このように、日本社会の蒙古襲来及び黒船、そして韓国社会の虎は諺や慣用句の素材に取り入れられて社会に提示され、同じく恐怖を表す諺や慣用句として成立している。

ところで、韓国社会でも歴史性によって派生した諺が普遍化されず、一定の地域だけで残っているものがある。「同価紅裳」と同じ意味の「같은 값이면 다홍치마」(直訳：同じ値であれば真っ赤なスカート)という諺がその事例である。つまり、「同じ値段であれば、良いほうを選ぶ」という意味であるが、その発生や成立の時期を推測するのは難しい。

しかし、「同価紅裳」や「같은 값이면 다홍치마」と同じ意味の「기왕이면 덕수궁」(直訳：できるなら徳寿宮)<sup>26)</sup>及び「기왕이면 창덕궁」(直訳：どうせなら昌徳宮)<sup>27)</sup>という諺が韓国のソウルと京畿地方を中心に用いられている。

前者の素材である徳寿宮は、もともとは世祖(1417～1468)の長男で成宗(1457～1494)の兄である月山大君(1433～1488)の邸宅であった。しかし、文禄・慶長の役の際、宮殿がすべて燃えてしまい、避難から戻ってきた宣祖(1552～1608)は住む場所がなかった。そこで、この邸宅を改築し貞陵行宮・貞陵東行宮とした。その後、光海君(1575～1641)は慶運宮と名称を改めた。

ところで、日本は1905年に大韓帝国との間で乙巳保護条約を締結し、大韓帝国の外交権を剥奪した。この条約が不当であると世界に向けて主張をするため1907年、光武帝の高宗(1852～1919)はオランダ(Holanda)のハーグ(Haag)

で開かれる万国平和会議に密使を派遣した。しかし、これを口実に日本は高宗を強制的に退位させ、同年、隆熙帝の純宗(1874~1926)を皇位に即位させた。1907年に退位した高宗が慶運宮に居住した。そこで、純宗は高宗の長寿を念願する意味で、1907年に徳寿宮と改称を行った<sup>28)</sup>。

後者の昌徳宮は、太宗が1404年に建てた宮殿であるが、1910年の日韓併合当時は、純宗が正殿として使っていた。

要するに、「기왕이면 덕수궁」は朝鮮王朝の王権が変わる出来事と結びついて成立した諺である。退位した高宗が徳寿宮に暮らすようになる1907年以降に成立したのは明白である。同じく「이왕이면 창덕궁」も1907年に純宗が皇位を継承し、昌徳宮に住むようになった頃に成立したと考える。この2つの諺は(表3)の②、③のような歴史性による派生ではあるが、全国に至る普遍化はしておらず、ソウルと京畿地方を中心に用いられている。

このように、日本の「蒙古がくる」と韓国の「기왕이면 덕수궁」・「이왕이면 창덕궁」は全国的に普遍化した諺や慣用句としては定着していない。言い換えれば、これらの諺や慣用句は広範囲の普遍化と成立に失敗した事例と言える。

## おわりに

日韓社会で使われている諺や慣用句の中で発生や派生、そして成立時期を把握することができるものは多くない。しかし、諺や慣用句の素材及び背景の経緯に基づき、その発生や派生、また成立時期の推測ができる諺や慣用句をもって分析を行うと、諺と慣用句は化石のようなものではないことに気づく。つまり従来、諺や慣用句として成立しているものとは異なる同じ意味の新たな諺や慣用句が現れるが、これは歴史性による新たな諺や慣用句の派生である。

諺や慣用句に繋がるのが社会に提示(発生)されるのは、概ね次の3つのきっかけによる。すなわち、出来事などを目撃・体験する、日常生活の中で観察・自覚をする、そして見聞・学習をするという契機を通して社会に提示される。その後、社会に拡散され、普遍化して諺と慣用句として成立し定着するという過程を経る。

諺や慣用句の発生から成立に至るまで社会の環境に大きな影響を受ける。諺

や慣用句の拡散と普遍化の過程では、交通手段、そしてマスコミをはじめとする出版物が大きな影響を及ぼす。その意味で前近代と比べて近代国民国家成立期以降における諺や慣用句の拡散と普遍化の速度は遥かに速い。とりわけグローバル化時代になると、様々な媒体を経由してリアルタイムで社会に提示され拡散される。

ところで、上記の3つの契機を通して社会に提示されたもののすべてが普遍化し、諺と慣用句として成立するわけではない。社会に提示されたものが全国的に拡散されず、一定の地域だけで通用される諺と慣用句が散見される。なお、グローバル化時代には様々な媒体を通じて諺や慣用句に繋がるものが社会に提示されるが、流行語として終わってしまうことが多い。

日韓社会における諺や慣用句の中で発生と歴史性による派生を追究することができるものはごく僅かに限る。この限られた諺や慣用句の中で、その素材や背景の経緯が把握できるものを探り、発生や派生という過程を紐解くことを通して社会の断面も垣間見ることができる。

## 注

- 1) 『古事記 日本古典文学全集』(小学館、1999年)上巻「忍穂耳命と邇々芸命」、そして『日本書紀1 日本古典文学全集』(小学館、1994年)巻第一神代上「素戔鳴尊と天照大神の誓約」に記されている。
- 2) 『新明解故事ことわざ辞典(第二版)』(三省堂、2016年)171頁。
- 3) 『国語辞典』(民衆書林、1991年、韓国)2696頁。
- 4) 李芳遠が起こした王子の乱に関しては、韓春順「太祖7年(1398) 제1차 왕자 난의 재검토(太祖7年(1398)第1次王子の乱の再検討)」(『朝鮮時代史学報』55号、朝鮮時代史学会、2010年、韓国)、洪最憲「조사의의(趙思義)의 난 연구-함흥차사 사건 역사성의 재검토- (趙思義の乱の研究-咸興差使事件の歴史性の再検討-)」(『京畿郷土史学』第11輯、全国文化院聯合会京畿道支会、2006年、韓国)を参照されたい。
- 5) 鈴木真哉『鉄砲と日本人』(ちくま学芸文庫、筑摩書房、2000年)、宇田川武久『真説鉄砲伝来』(平凡社、2006年)

- 6) 『岩波ことわざ辞典』(岩波書店、2002年) 563頁によれば、江戸初期の慶長～延宝(1603～1680年)頃にミイラから採れるとされた油がポルトガル船などで輸入され、高価ながらも万能薬として人気があったとする。そして江戸中期の天和～安永(1681～1780年)頃の赤本『名人ぞろへ』にはミイラ取りの情景が記され、浄瑠璃『本朝二十四孝』などに諺の用例としてよく見られるとある。さらに、宝永6(1709)年に貝原益軒(1630～1714)が書いた『大和本草』には「ミイラ」という項目のもと説明が行われている。貝原益軒著・白井光太郎考註『大和本草』(第二冊、有明書房、1983年) 272頁。
- 7) 沙也可は、朝鮮の国王から金という名字を授けられ、金忠善と名乗った。英祖10(1798)年、子孫は金忠善が書いた文集を集め『慕夏堂文集』(奎章閣図書)を発行しているが、鉄砲の製造について記されている。そして한문중「임진왜란시의 항왜장 김충선과 모하당문집(壬辰倭乱のときの降倭将金忠善と慕夏堂文集)」(『韓日関係史研究』第24号、韓日関係史学会、2006年、韓国)を参照されたい。
- 8) 前掲『岩波ことわざ辞典』7頁。
- 9) 笠原秀『信号機のルーツをさぐれ!』(アリス館、2001年) 41頁。さらに67頁では、世界初の交通信号機は手動交通信号灯で1868年ロンドン(London)、1919年にはニューヨーク(New York)にも設置されたとする。
- 10) 柳沢光二「極東の日本を目指してー大飛行時代に訪日した飛行家たち「第1回・フェラリン」ー」(『航空ファン』1月号、文林堂、2021年)
- 11) 義江影夫『鎌倉幕府地頭職成立史の研究』(東京大学出版会、1978年)、関幸彦『地頭』(吉川弘文館、1983年)
- 12) 昔、自分が世の中で一番怖い存在だと思っていた虎がいた。ある日、この虎が食べ物を求めて人々が住む村に降りてきた。ちょうどある家で幼子が泣いていて母親は泣き止むようにあやした。しかし、幼子は母親がどんなにあやしても泣き止まなかった。そこで、母親が「호랑이가 온다」(直訳: 虎がくる、意識: 怖いものがくる)と言っても泣き続けていて、「干

し柿」をあげると言った途端、泣き止んだ。幼子が干し柿という言葉聞いて泣き止んだので、虎は干し柿が自分より怖いものだと思い逃げたという内容である。これと類似した内容は『日本伝統文化辞典』（教育出版株式会社、2006年）110～111頁、そして神谷丹路 再話「とらより こわい ほしがき」（『10分で読めるお話』学研、2006年）でも紹介されている。

- 13) 静永健「賈島「推敲」考」（『中国文学論集』29号、九州大学中国文学会、2000年）、そして金泰虎「前近代の東アジア漢字文化圏における交流と語彙」（『Zephyr（ゼフィール・にしかぜ）』50号、甲南大学国際言語文化センター、2011年）では推敲に関することを言及している。
- 14) 前掲『岩波ことわざ辞典』563頁。
- 15) 浅見雅一『フランシスコ ザビエル 東方布教に身をささげた宣教師』（山川出版社、2011年）を参照されたい。
- 16) 岸野久『サビエルの同伴者アンジロー—戦国時代の国際人—』（吉川弘文館、2001年）、そして金泰虎「十六世紀末の東アジアにおける国際関係とイエズス会」（『地域と社会』2号、大阪商業大学比較地域研究所、1999年）ではアンジローについて述べている。
- 17) 前掲『岩波ことわざ辞典』7頁の「赤信号皆で渡れば怖くない」は、1979年に漫才師ツービートが言い出して流行語となったとする。つまり、諺に繋がるものが社会に提示されたと見なしたい。
- 18) 19世紀半ば、西洋列強が朝鮮の沿岸に軍艦を送り開港を迫ることが頻発する中、高宗3（1866）年にアメリカの商船ジェネラル・シャーマン（General Sherman）号が通商を求めてきたが、朝鮮側が撃退する「丙寅洋擾」という事件が発生した。その後、1871年にアメリカは軍艦を派遣する辛未洋擾が起きた。当時、アメリカの軍艦には従軍写真家のフェリーチェ・ベアト（Felice Beato）（1832～1909）が同乗していた。ベアトは1871年5月30日、朝鮮の下級官吏であるキムジンスン（김진성）が軍艦に乗り込みビール瓶を抱え込んで降りた姿を撮っている。この写真はアメリカのパウロゲティ―博物館（J.Paul Getty Museum）に保管されている。

詳しくは「상투 들고 끌어안은 맥주병 (丁髻の姿で抱え込んだビール瓶)」（『朝鮮日報』朝鮮日報社、2021年5月17日、韓国）を参照されたい。

- 19) 「蒙古がくる」という諺については、福島県会津出身の大阪商業大学の田崎公司先生からご教示を頂いた。
- 20) 蒙古襲来に関しては数多くの研究が行われてきているが、それよりも当時の戦闘様子をリアルに描いた『蒙古襲来絵詞』が伝来されている。『蒙古襲来絵詞』（日本の絵巻13、中央公論社、1990年）を参照されたい。
- 21) 七宮淳三『三浦・会津 蘆名一族』（新人物往来社、2007年）
- 22) BS6 TBS「令和の黒船ー日本人が知らないニッポンー」（2021年2月20日（土）PM11:00～12:00の放送番組）。番組の中では「令和の黒船襲来」とも言われていたが、中国が経済、軍事などの脅威だけではなく、大勢の中国からの留学生が日本の大学に押し寄せてくる状況をもって恐怖として捉えている。
- 23) 「デジタル大辞泉（小学館）」（『電子辞書』CASIO、2013年）による。
- 24) 遠藤公男『韓国の虎はなぜ消えたのか』（講談社、1986年）213頁によれば、1919～1924年の間に全羅道と慶尚道の地域で捕獲した虎は15頭にも上る。
- 25) 文禄4（1595）年、島津義弘が戦場で虎狩を行い秀吉に虎の骨肉を献上したことに對する秀吉の礼状（「豊臣秀吉朱印状」東京史料編纂所所蔵）が残されている。虎狩の様子を描いた絵画は、「黎明館」・「九州国立博物館」・「尚古館」・「都城歴史資料館」に伝わっている。
- 26) 地域別の諺を収録している『속담사전（ことわざ辞典）』（民俗院、2002年、韓国）57頁。
- 27) 前掲『속담사전（ことわざ辞典）』258頁。
- 28) 홍순민『우리 궁궐 이야기（我が宮闕の話）』（청년사（チョンニョンサ）、2010年、韓国）

## &lt;参考文献&gt;

日本語（年代順）

- ・ 義江影夫『鎌倉幕府地頭職成立史の研究』（東京大学出版会、1978年）
- ・ 貝原益軒著・白井光太郎考註『大和本草』（有明書房、1983年）
- ・ 関幸彦『地頭』（吉川弘文館、1983年）
- ・ 遠藤公男『韓国の虎はなぜ消えたのか』（講談社、1986年）
- ・ 『蒙古襲来絵詞』（日本の絵巻13、中央公論社、1990年）
- ・ 『日本書紀1 日本古典文学全集』（小学館、1994年）巻第一神代上「素戔鳴尊と天照大神の誓約」
- ・ 『古事記 日本古典文学全集』（小学館、1999年）上巻「忍穂耳命と邇々芸命」
- ・ 金泰虎「十六世紀末の東アジアにおける国際関係とイエズス会」（『地域と社会』2号、大阪商業大学比較地域研究所、1999年）
- ・ 鈴木真哉『鉄砲と日本人』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、2000年）
- ・ 静永健「賈島「推敲」考」（『中国文学論集』29号、九州大学中国文学会、2000年）
- ・ 『信号機のルーツをさぐれ!』（アリス館、2001年）
- ・ 岸野久『サビエルの同伴者アンジローー戦国時代の国際人ー』（吉川弘文館、2001年）
- ・ 『岩波ことわざ辞典』（岩波書店、2002年）
- ・ 『日本語慣用句辞典』（東京堂出版、2005年）
- ・ 『日本伝統文化辞典』（教育出版株式会社、2006年）
- ・ 神谷丹路 再話「とらより こわい ほしがき」（『10分で読めるお話』学研、2006年）
- ・ 宇田川武久『真説鉄砲伝来』（平凡社、2006年）
- ・ 七宮淳三『三浦・会津 蘆名一族』（新人物往来社、2007年）
- ・ 浅見雅一『フランシスコ ザビエル 東方布教に身をささげた宣教師』（山川出版社、2011年）
- ・ 金泰虎「前近代の東アジア漢字文化圏における交流と語彙」（『Zephyr（ゼフ



- ・『イール・にしかぜ』50号、甲南大学国際言語文化センター、2011年)
- ・『電子辞書』(CASIO、2013年)
- ・『新明解故事ことわざ辞典(第二版)』(三省堂、2016年)
- ・柳沢光二「極東の日本を目指してー大飛行時代に訪日した飛行家たち「第1回・フェラリン」ー」(『航空ファン』1月号、文林堂、2021年)

#### 韓国語(年代順)

- ・『国語辞典』(民衆書林、1991年、韓国)
- ・国立国語研究院『標準国語大辞典』(斗山東亜、1999年、韓国)
- ・『속담사전(ことわざ辞典)』(民俗院、2002年、韓国)
- ・한문중「임진왜란시의 항왜장 김충선과 모하당문집(壬辰倭乱のときの降倭将金忠善と慕夏堂文集)」(『韓日関係史研究』第24号、韓日関係史学会、2006年、韓国)
- ・洪畧憲「조사의(趙思義)의 난 연구-함흥차사 사건 역사성의 재검토-(趙思義の乱の研究-咸興差使事件の歴史性の再検討-)」(『京畿郷土史学』第11輯、全国文化院聯合会京畿道支会、2006年、韓国)
- ・홍순민『우리 궁궐 이야기(我が宮闕の話)』(칭년사(チョンニョンサ)、2010年、韓国)
- ・韓春順「太祖7年(1398) 제1차 왕자 난의 재검토(太祖7年(1398)第1次王子の乱の再検討)」(『朝鮮時代史学报』55号、朝鮮時代史学会、2010年、韓国)
- ・『朝鮮日報』(朝鮮日報社、2021年5月17日、韓国)